こころの未来 30

鎌田東二
京大こころの未来研究センター教授

基地の島と神の島～「久高オデッセイ」三部作完成

新たな命と希望伝える

沖縄の意味と未来 考えて

文化

　沖縄は「基地の島」である。日本国内にある米軍基地の75％ほどが沖縄に一極集中している。その中の普天間基地の辺野古湾への移設をめぐって大反対運動が起きている。これまでの流れを考えれば当然のことである。だが、日本政府は米国との約束を優先し、結果的に沖縄住民の意思を拒否している。

　辺野古湾は生物多様性も豊かで絶滅危惧種ジュゴンの生息北限の海である。湾の先端部の小さな島には「竜宮の宮」が祭られている。このつつましくも長い民俗信仰の歴史を持つ海の神を祭る竜宮と、海兵隊の寮のある米軍基地、移設されようとしている普天間基地代替施設とは、180度真逆の施設といえる。片や小さくて自然の中に溶け込んでいる。片や大きく自然に向かって牙をむく。その両者が浜を隔てて向き合っている。そのキメラ的異様さと不調和。

　戦争後の政治と冷戦構造の下で「基地の島」となった沖縄本島には、古来東西に二つの「神の島」と呼ばれる島があった。東の南城市にある久高島と西の今帰仁村にある古宇利島である。この二つの「神の島」は、沖縄本島を対角線のように結ぶ東南と西北の位置にあって、冬至の朝日が昇り、没していく「太陽の穴（テダガアナ）」であり、沖縄の神観と自然信仰が集約された島だった。

　その東の「神の島」の記録映画をこの12年撮り続けてきたのが大重潤一郎監督である。大重は1970年のデビュー作「黒神」から、「大阪町のチベット」と呼ばれた能勢のミサイル基地建設の反対運動を記録した72年の「能勢～能勢ナイキ反対住民連絡会議」を経て、91年の「水の心」、96年の「光りの島」「風の島」、2001年の「小川プロ訪問記」など、次々に自然と人間と文明との葛藤と調和への希求を描く記録映画を発表し続けてきた。

　そして、00年に「縄文と原郷ニライカナイへ―比嘉康雄の魂」、01年に「ビッグマウンテンへの道」を「古層三部作」として発表。その後沖縄に移住して、故比嘉康雄氏の遺志を受け継ぎながら久高島と那覇市で暮らし、「久高オデッセイ」の制作に取りかかった。

　だが04年10月、脳内出血に倒れ、再起不能の状態まで追い込まれながら激痛に耐え、肝臓がんと半身不随の体にむち打ち、06年に「久高オデッセイ第一部結章」、09年に「久高オデッセイ第二部生章」を完成。ついに今年6月、「久高オデッセイ第三部風章」を完成させる。

　久高島は沖縄本島東南部に浮かぶ人口200人ほどの大変小さな島で、琉球王朝時代から「神の島」として東方ニライカナイ信仰（他界信仰）を保持してきた島である。そこでは12年に1度、午年に神女になるための儀式イザイホーが行われてきたが、1978年以降その伝統も途絶えている。今年1月5日は旧暦午年のその日に当たったが、イザイホーの祭りは行われなかった。

　だが、この13年間の久高島の歴史は大重映画「久高オデッセイ」三部作に刻み込まれている。第一部では漁労祭祀の中心をなす男性神役ソールイガナシーの退任が、第二部では最後の神女の退任が描かれ、確かに島の祭祀が不可抗力的に薄らいでいくさまが浮き彫りになった。しかしながら第三部では、島に新しい命が誕生し、若い神女が育ってきている新たな息吹と「風」が力強く表現されている。

　もちろん、「基地の島」沖縄と「神の島」久高島の未来は誰にも予測できない。だが確かなことは、この「基地の島」に埋蔵された宝物のような「神の島」の精髄と命を大重潤一郎が見つめ続け、その姿を可視化し、そこに新たな命と希望が生まれてきたことの事実を悠然たる命のリズムの映像とともに表現したことは事実である。

　映像を通して風や空気や気配を感じてほしいという「気配の魔術師」大重潤一郎の真骨頂がにじみ出ている入魂の作品「久高オデッセイ第三部」と三部作全編は、7月5日に東京両国のシアターXで一挙上映される。

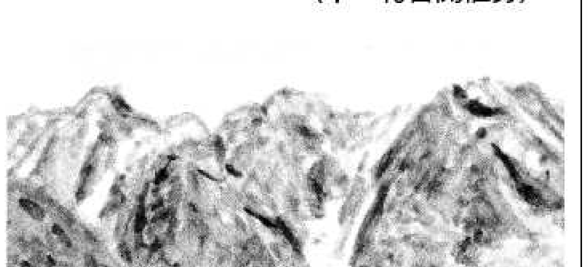
　この「久高オデッセイ」と名付けられた稀有なる命の賛歌を歌う映像叙事詩をぜひ多くの方々に見ていただきたい。その映画の第三部の語りを女優の鶴田真由氏、音楽を新実徳英氏が担当している。その声と歌を体で心で魂で聴いていただきたい。そして「基地の島」に「神の島」や「竜宮の宮」があることの意味と未来をよくよく考えてほしいのである。（阿南市出身）

× ×

問い合わせ先はNPO法人東京自由大学ホームページ〈http://jiyudaigaku.la.coocan.jp/〉

美術展あんない 県内

〈1～15日開催分〉



黒﨑志郎「霞岳と梓川」＝画廊喫茶グレイスで開かれる個展から

▽第29回県書道展（～2日、4～7日、あわぎんホール）漢字や仮名、近代詩文、篆刻の創作および臨書作品。

▽珠玉のコレクションでたどる日本洋画のあゆみ展（～14日、相生森林美術館）小山正太郎や藤島武二ら明治から昭和までの日本を代表する洋画家の油彩画、水彩画、デッサンなど58点。

▽美の饗宴　西洋絵画の300年～バロック、ロココからエコール・ド・パリまで（～21日、県立近代美術館）17世紀のバロックから20世紀のエコール・ド・パリまで西洋美術の歴史を展望する。

▽石原弘回顧展&県内画家が描いた花の絵展（1～15日、鳴門市撫養町小桑島・キョーエイ鳴門駅前店）鳴門市の画家が海と山を描いた遺作7点などを展示。

▽黒﨑志郎水彩スケッチ展（1～30日、徳島市銀座・画廊喫茶グレイス）黒﨑（徳島市）が描いた風景17点。

▽谷口裕志作陶・絵画展（2～8日、そごう徳島店）谷口（上板町）のつぼ、花器、茶わんなど80点余。アクリルで描いた抽象画約10点。

▽麻植塚アート2015水彩・油彩・アクリル画（2～14日、吉野川市鴨島町牛島・サンスマイル）8人の会員が花や風景を描いた約16点。

▽徳島アート21　第13回展（3～7日、あわぎんホール）18人の油彩、水彩画、版画40点余。

▽鈴木良治展（3～15日、徳島市東船場町1・眉峰ギャラリー）鈴木（徳島市）の子どもを主体に描いた油絵13点。

▽第38回写真同人〝炎〟作品展（5～7日、徳島市シビックセンター）19人の約170点。

▽第15回写団BaraBara写真展（6～14日、徳島市八万町上長谷・ギャラリー花杏豆）10人が自由なテーマで撮った約30点。

▽第22回或る点の水墨画展（8～12日、よんでんエネルギープラザ阿南）中原博（徳島市）が描いた風景、人物、仏像など約50点。

▽第38回八紅展（11～14日、阿波銀プラザ）八紅会の会員8人が描いた油彩画約30点。

▽第68回示現会巡回徳島展（12～16日、あわぎんホール）徳島支部員の27点を含む水彩、油彩画87点。

▽第3回伊丹直子蒲鉾板絵展（12～29日、神山町神領・ギャラリー杣人）伊丹（小松島市）が花やネコを描いた約70点。

▽鉄道写真展　高徳線全通80周年記念（13～30日、鳴門市ドイツ館）鉄道友の会四国支部徳島サークルの会員が撮った同線の駅舎や汽車、風景など約40点。

▽フォト四季作品展（15～19日、よんでんエネルギープラザ阿南）会員が撮った桜など春の風物とスナップ45点。

【紙面編集】齋藤邦彦

総論★各論

■5月■

9条は対米従属前提か

沖縄の基地が問う戦後

　昨年末に翁長雄志が新知事に就任した沖縄県が、米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設を進める国と鋭く対立している。悲惨な地上戦や米軍統治に苦しんだ沖縄に、在日米軍基地の大半が置かれた日本の戦後が問い直されている。

　「甘えているのは沖縄ですか。それとも本土ですか？」。沖縄大地域研究所特別研究員の親川裕子「非戦の思想」（「現代の理論」デジタル版4号）は、翁長の3年前の発言を冒頭に掲げた。

　経済振興策と引き換えに基地負担を強いる国に「経済援助なんかいらない」「そのかわり、基地は返してください」と反発した翁長を知事に押し上げたのは、基地の新増設を拒む揺るぎない民意だったと指摘。沖縄は国政、地方選挙を問わず「公約違反をした者は選挙で落とす」民主主義を実践してきたと胸を張る。

　新知事が誕生して終わりではない。沖縄出身の芥川賞作家、目取真俊「ナショナリズムとアイデンティティのはざまで」（「週刊金曜日」5月15日号）は、沖縄が国の支配を脱して自治権を勝ち取る必要を力説。尖閣諸島の問題を例に挙げ「中国と対峙する日米の軍事的最前線」として、国益のために利用されてはならないと訴える。

　ただ本土との断裂は深い。自衛隊出身の国際大教授、山口昇は琉球大教授の我部政明との対談「『普天間』という火種の根本にあるもの」（「中央公論」6月号）で、国際秩序を支える米軍の存在感を強調。中国だけでなく北朝鮮、ロシアの脅威の中で「日本が日米安保から享受している利益を考えれば」、地政学的に重要な沖縄の米軍基地は欠かせないと説く。

　4月に翁長と会談した首相や官房長官が、沖縄の世論を「一顧だにしない」印象を受けたと失望を語る我部に対して、山口は「腹を割って話し、思いを共有するためのきっかけができた」。ちぐはぐな議論がもどかしい。

　そもそも戦争放棄をうたう憲法9条がありながら、他国の軍事基地を撤去できないのはなぜか。文芸評論家の加藤典洋「戦後の起源へ」（「myb」新装1号）は、憲法の平和理念が中途半端だからではないかと問題提起し、「憲法九条の理念を疑う」必要を説く。

　内田樹や矢部宏治らの議論を引きつつ注意を促すのは、9条が日本の対米従属を前提に、自衛隊や米軍、核兵器と「相補的に支え合っている」可能性だ。日米安保条約あっての平和憲法なら、米軍基地をなくす力になるはずもない―。

　9条を改正して対米従属の戦後を突き抜けようとする加藤の平和論は刺激的だが、9条改正は現政権の復古的な改憲案の柱でもあり、沖縄の反発は強い。

　「自民党改憲案が成立するなら、沖縄はその日に独立すべき」との強硬論もあると親川は言う。「戦後の脱却」が何を意味し、何をもたらすのか。目を離せない状況が続く。（敬称略）

このほかの注目論文

「日本の歴史認識とアジア外交の未来」
村山富市・元首相、河野洋平・元官房長官
「世界」6月号
過去の植民地支配と侵略に対する反省と謝罪を明記した政府談話の主役2人が対談。談話の意義を強調し、現政権の戦後70年談話でも内容を踏襲するよう求める

「増加するネット依存症の現在」
樋口進・国立病院機構久里浜医療センター院長
「潮」6月号
オンラインゲームに依存し生活に支障を来す若者の急増を告発。現実世界に居場所がない男子が多く、スマートフォンの普及で見分けがつきにくい難点も指摘

「習近平、プーチン演ずる「新・世界秩序」の舞台裏」
フランシス・フクヤマ・米政治学者
「中央公論」6月号
中国とロシアの急接近を解説。米国の覇権の弱体化という共通目標の一方で、中央アジアの利権をめぐる火種もあり、利害を超えた同盟にはつながらないとみる

句集を読む

船越淑子
「青海波」主宰

福島せいぎ「台湾抄」

民間交流など210句に

台湾抄
福島せいぎ

　句集「台湾抄」は「なると俳句会」主宰福島せいぎさんの「台湾優遊」以降16年間の作品から、台湾の印象を210句にまとめた第9句集である。

　酋長と酒酌む朧月夜かな

　「酋長」制度が現存しているのはさすが台湾だ。部族や民族の長「酋長」は台北に現在もおられるそうだ。一夜酒席をご一緒されたとか、得難い巡遇だ。折からの朧月はきっと終生記憶に生きている景になったことだろう。

　南溟にたましひあそぶ黒揚羽

　第2次世界大戦で日本は無理な拡張戦略のために有能な前途ある人材を南海の藻くずと散らせてしまった。何度悔いても余りあるものがある。魂の象徴である黒アゲハチョウ。存分に遊べよこの南の島で、大きくはばたけ黒アゲハよ。悲しく厳しい鎮魂の作品だ。

　そのかみの阿波の移民の田植かな

　戦前から台湾には日本語学校もあり、年配の方の中には日本語ペラペラの人もたくさんいて、親近感をもって付き合ってくださっていた。吉野村では阿波からの移民制度があったことも知らなかったが、今も山から引いた水で昔通りの田植えをしているのだ。

　かなり以前に台湾通の人と台北を訪れた時、商店街で大きな衣料品店を経営している親日家と会った。娘さんを東京へ留学させていると誇らしげに話していた。俳句的民間交流「台湾抄」をまとめられた意義も大きいものがあったと思う。

　浮いてこい占ひ横丁にぎはへり

　高階のホテルの窓から下を見ていると何か人だかりができている。降りてのぞいて見る。ここは占い師の路地だったのだ。占いの結果が吉と出るか凶と出るかいずれにしても「浮いてこい」。あくまでも季語選択の妙。

　清朝の朱塗りの御虎子蜘蛛ひそむ

　中国最後の王朝「清朝」時代の「オマル」とあれば貴重な遺品だ。朱塗りはやはり高貴な方の使用された物なのか。故宮博物院のガラスケースの中ではクモなど入り込む余地は皆無だ。骨董市に並んでいたのだろうか。詮索はよそう。歴史的オマルに潜む現代のクモの俳諧味に焦点を合わすべきなのだ。

◇

　「台湾抄」はなると俳句会発行、2800円（税別）。福島せいぎさんは徳島市吉野本町在住。

短信

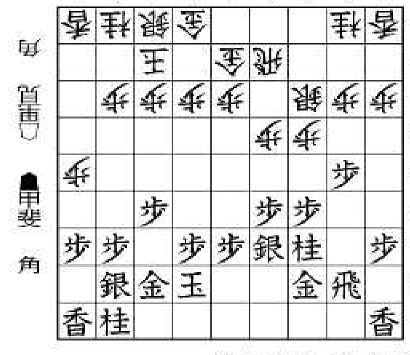
◆第29回日洋展入選者（徳島県関係）
　中村恵一（石井町）、岡田信一（藍住町）

　同展は8日まで東京・国立新美術館で開催。大阪巡回展は7月22日から26日まで大阪市立美術館で開かれる。

第26期 女流王位戦

5番勝負
第1局
●女流王位　甲斐智美
○女流名人　里見香奈

【第2譜】（図は●3八金まで）



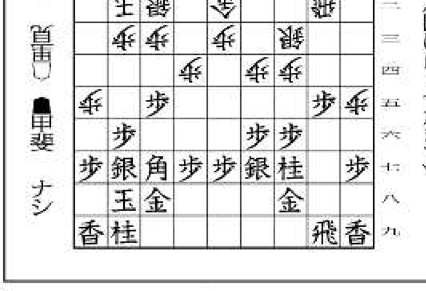
持ち時間　各4時間
消費 ●1時間45分 ○1時間3分
指し手　41手

●8六歩1　●8七銀　●7五歩34　●2九飛16　●7九玉19　●同歩4　●2五歩　●8八玉9　●7七角3
○8二玉　○7一銀　○6四歩4　○2二飛42　○1四歩4　○2四歩1　○同飛　○2二飛　○1五歩1

予定変更

　対局場の旅館「夢乃井」は、JR姫路駅から車で30分ほどの塩田温泉にある。緑豊かな里山に抱かれ、眼下に流れる夢前川が広大な田畑を潤す。女流王位戦は今期で4年連続の開催だ。

　日本将棋連盟会長として現地を訪れていた谷川浩司九段は、左右分裂気味の先手の陣形を見て「まるで山崎君（隆之八段）の将棋を見ているようですね」と目を細めた。次いで●8六歩～●8七銀には、●2九飛からの地下鉄飛車で9筋を逆襲する気配が漂う。が、甲斐は●7五歩～●7九玉と自重。当初は7四歩型の高美濃に対して●9六歩と仕掛ける構想だったが●7七桂と跳んだ形が桂頭に弱点を抱えるので断念したという。



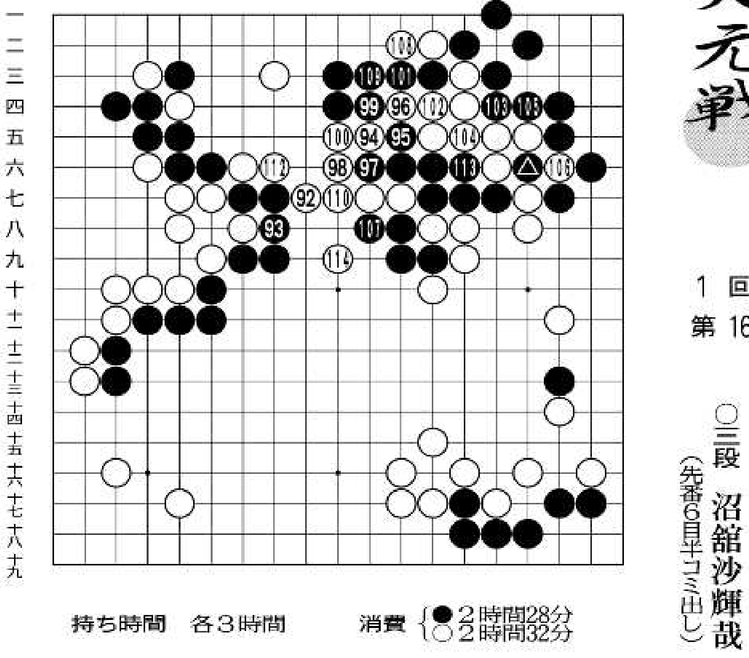
（図は●7七角まで）

　向かい飛車に転じた里見が2筋の歩を換え、飛車を引いたところで昼食休憩に。心づくしの御膳を味わい、午後1時に再開。●8八玉と入城した甲斐は●7七角と打ち据えた。（小池大志）

第41期 天元戦

1回戦
第16局
●七段　大橋成哉
○三段　沼舘沙輝哉
（先番6目半コミ出し）

【第5譜】　92―114



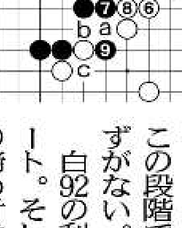
持ち時間　各3時間
消費 ●2時間28分 ○2時間32分

作戦完了

　侵入していった白を捨て石に黒を大きく分断する。沼舘の大作戦が走りだした。事ここに至ってはもう止めようがないが、もっと早い段階で大橋が気付いていれば防ぎようはあった。

　前譜で約束した手段である。▲（黒69）で参考図、黒1から9の荒らし合い路線だ。以下、白aには符号順に黒dまで。白aでcは黒aでいい。白模様を破って黒もやれたが、この段階では気付くはずがない。

参考図



　白92の利かしがスタート。そして白94以下の締め付けが一本道の進行だ。黒には選択の余地がなく、黒105に詰めて白106のコウ取り。ここで黒107のコウ立てが命綱だが、白112には黒113と9子を抜くしかない。白114と左右を割って大作戦の仕上げである。

　打ち上げた黒の戦果は小さくないが、分断された左右の黒は一気に心細く、ただでは済まない事態だ。（中平邦彦）

黒111コウ取る（106の左）